

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770124

研究課題名(和文)近代日本におけるポール・ブルジェとフランス伝統主義の受容

研究課題名(英文)The Reception of Paul Bourget and French Traditionalism in Modern Japan

## 研究代表者

田中 琢三(TANAKA, Takuzo)

お茶の水女子大学・基幹研究院・助教

研究者番号：50610945

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近代日本におけるポール・ブルジェの受容を検討した。まず、皇国史観の代表的な歴史家である平泉澄におけるブルジェの伝統主義思想の影響を分析した。第二に、アカデミックな文学研究の世界においてブルジェがどのように評価されたのか、そして、ブルジェの小説が戦時下の日本でどのように読まれたのかを調査した。本研究の結果、近代日本の国家主義的イデオロギーとフランス伝統主義の知られざる関係が明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：This research examined Paul Bourget's reception in modern Japan. First we analyzed the influence of Bourget's traditionalism on Kiyoshi Hiraizumi, a historian representative of the imperial view of history. Secondly, we explored how Bourget was appraised in the academic study of literature, and how his novels were read in wartime Japan. The results of the present study revealed a heretofore unknown relationship between the nationalistic ideology of modern Japan and French traditionalism.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 比較文学 日本：フランス 政治思想 文献学

### 1. 研究開始当初の背景

これまでの日本のフランス文学研究においては、19世紀末～20世紀初頭の世紀転換期の小説が、その量的な多さと質的な多様性にも関わらず、研究対象になることが少ない状況であった。本研究課題の研究代表者は、この空白を埋めるため、世紀転換期の小説、特に政治的イデオロギーが色濃く反映されたポール・ブルジェ(1852-1935)、モーリス・バレス(1862-1923)らの思想小説を中心に研究を進めてきた。その過程で、現在では読まれなくなったブルジェの小説、特に彼の伝統主義的な傾向を持つ思想小説が、大正期から我が国のアカデミズムの世界で研究され、第二次世界大戦期の日本では国家主義的イデオロギーの台頭と軌を一にするように盛んに翻訳され、ベストセラーになっていたことがわかった。しかし、日本におけるブルジェの受容に関する本格的な研究は、村田裕和氏の論文「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争 エミール・エックと太宰施門の第一次世界大戦」(『比較文学』第50巻、2007年)など限られたものしかないという状況であった。そこで、ブルジェを中心とするフランス世紀転換期の伝統主義の受容、とりわけその保守的な政治思想の受容について、戦前日本の国家主義的イデオロギーとの関係を視野に入れながら、総合的に研究する計画を着想した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、ベル・エポック期フランスを代表する作家の一人であるポール・ブルジェの近代日本における受容のあり方とその政治的、歴史的背景を、実証的な資料文献の調査に基づいて解明することである。具体的には、ブルジェの小説や彼の伝統主義的で国家主義的な思想が、明治・大正期から戦前・戦中にかけて、我が国のアカデミズムや出版界において、どのように紹介され、受け入れられたのかを検査するとともに、ブルジェとイデオロギー的に近い立場にあったモーリス・バレスら近代フランスの伝統主義の作家たちの受容に関しても並行して研究を進め、近代日本、特に第二次世界大戦期の我が国の国家主義的イデオロギーにおけるフランス伝統主義思想の影響とその射程を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 国立国会図書館をはじめとする日本国内の各種の図書館や古書店あるいはインターネット上の資料等を利用して、今日までに日本で刊行されたブルジェおよび近代フランスの伝統主義の作家たちの著作の翻訳や、彼らに関する研究書、論文、新聞・雑誌の記事を、可能な限り閲覧あるいは入手し、それらの情報をデータベース化する。

(2) この文献調査・資料収集を基盤にしな

がら、以下の作業を行う。

皇国史観を代表する歴史家である平泉澄(1895-1984)がブルジェから受けた影響を検討するために、ブルジェや近代フランスの伝統主義を論じた平泉の著作、論文、講演録、インタビューなどを精読する。

戦前日本のアカデミズムにおけるブルジェ受容のあり方を探るため、この作家に関する研究が多い仏文学者の太宰施門(1889-1974)に焦点を当て、太宰が発表したブルジェおよびフランス文学に関する研究書、論文などを分析する。

戦前・戦中に数多く翻訳・刊行されたブルジェやバレスの著作が、戦時下の日本でどのように受け入れられたのかを分析するため、政治的・社会的状況を視野に入れながら、同時代の関連書や新聞、雑誌の書評等を網羅的に読み解く。

### 4. 研究成果

本研究によって得られた主な成果は、研究期間内に学術雑誌に投稿、掲載された3つの論文(「5. 主な発表論文等」[雑誌論文]～)で発表した。以下はその概略である。

(1) 《L'influence de Paul Bourget sur Kiyoshi Hiraizumi : rencontre des deux traditionalismes japonais et français》(「5. 主な発表論文等」[雑誌論文]、タイトル日本語訳は「ポール・ブルジェの平泉澄への影響 日本とフランスのふたつの伝統主義の邂逅」)は、ブルジェの思想が戦前の皇国史観の代表的な歴史家である平泉澄に与えた影響を検討し、さらに両者の伝統主義思想の比較を試みたフランス語の論文である。この論考では以下を明らかにした。平泉がブルジェや近代フランスの伝統主義者の反革命思想に共感したのは、当時自らもマルクス主義の革命思想に脅威を抱いていたからである。平泉とブルジェの思想の共通点は、君主制と伝統的宗教の擁護、民族の特殊性の重視とその連続性を断絶させる革命に対する憎悪、国際主義に対する批判にある。ただし平泉はブルジェのような反ユダヤ主義者ではなく、民族の伝統を守るユダヤ人を評価していた。ブルジェをはじめとする近代フランスの伝統主義の思想と出会うことによって、平泉は一国の歴史は民族の特殊性と切り離せないという自らの歴史観や伝統主義に基づく反革命思想の普遍性に確信を持つことができた。その後、平泉は皇国史観のイデオログとして積極的に戦争に協力することになる。

本論文は世界で初めてフランス語で平泉澄の思想を論じたものであり、戦前日本の国家主義的イデオロギーの中核となった平泉の皇国史観を、フランスなどの諸外国に紹介するひとつの糸口を作ったといえる。

(2) 《La réception de Paul Bourget et de

la « littérature traditionaliste » française chez Simon Dazai »(「5. 主な発表論文等」[雑誌論文]、タイトル日本語訳は「太宰施門におけるポール・ブルジェとフランス「伝統主義の文学」の受容」)は、戦前を代表する仏文学者の一人である京都帝国大学教授の太宰施門がブルジェをどのように評価し、日本にどのように紹介したのかを検討したフランス語の論文である。この論考では以下を明らかにした。太宰施門のブルジェに対する評価や文学観は、東京帝国大学仏文科の教授エミール・エック(1868-1943)の影響が決定的である。太宰の研究書『伝統主義の文学』『仏蘭西文学史』(ともに1917年)の大部分は、17世紀の古典主義を重視するフランスの「講壇批評家」の著作の抜粋からなる。大正期に太宰はエックの影響でブルジェを「伝統主義の文学」の代表的作家として紹介していた。「伝統主義の文学」は、自然主義への反動、古典主義の美学、カトリシズムへの回帰、愛国主義を特徴とする。昭和期も太宰はブルジェの研究を続けるが、もはや「伝統主義の文学」の作家としてではなく、文学史に残る偉大な作家として紹介している。ただし、フランスの古典主義を理想とする太宰の文学観は一貫して変わっていない。

本論文は、村田裕和氏による先行研究(「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争 エミール・エックと太宰施門の第一次世界大戦」)の一部を補完、発展させたものであり、太宰の全時期の著作を通じて戦前日本のアカデミックな領域におけるブルジェ受容のあり方の一端を解明した。またこの論文をフランス語で発表したことは、日仏両国の比較文学研究の発展にとって有益な成果であるといえる。

(3)「戦時下の日本におけるモーリス・バレスの受容について」(「5. 主な発表論文等」[雑誌論文])は、2015年10月に日本比較文学会第53回東京大会で行った口頭発表(「5. 主な発表論文等」[学会発表])をもとに執筆した日本語の論文であり、大正時代から第二次世界大戦期にかけてのバレスの受容、特に戦時中に『科学の動員』の翻訳が出版された背景と意義を探ったものである。この論考では以下を明らかにした。第一次世界大戦期にエミール・エックが講演でバレスをフランスの文化的ナショナリズムの体現者として紹介した。第二次世界大戦期には、思想的に軍国主義や全体主義と親和性の高いバレスの代表的な小説群が、戦時下という時局の影響で翻訳された。バレスの『科学の動員』は、第一次世界大戦を教訓にしてフランスにおける科学振興の重要性を説く著作である。日本では、日中戦争の開始を契機に国家総動員法が制定され、戦争に対応した科学政策も具体化していく。『科学の動員』の翻訳は、こうした状況を背景に、

科学動員政策の必要性を特に学者や知識人に訴えるために日本学術振興会が出版したものである。技術官僚であり、戦中の一時期は日本の科学政策の中心に位置していた宮本武之輔(1892-1941)はこの訳書を読み、それをひとつの拠り所として科学教育を論じた論考を残している。また、宮本のその他の著作にみられる科学政策に関する主張も『科学の動員』における主張と酷似しており、宮本がバレスの影響を受けていることは明らかである。

本論文は、従来はほとんど検討されてこなかった我が国におけるバレスの受容を論じたものであり、フランス文学史において重要でありながら、あまり知られていないバレスという作家に関して、日本でより詳しく研究されていくひとつの契機になりうると思われる。また、この論文では戦時体制と結びつきの強いバレス作品の翻訳を取り上げて、文学によるひとつの戦争協力のあり方を浮き彫りにしたが、これは比較文学研究において非常に重要なテーマであり、今後の研究で発展させうる課題だと思われる。

(4)以上に述べた研究と並行して、第二次世界大戦期に相次いで翻訳・出版されたブルジェの小説作品、特に1939年に刊行されてベストセラーとなった広瀬哲士訳の『死』(原題は『死の意味』)が、戦時下の日本でどのように読まれたのかを探るため、当時の新聞の書評等の関連文献を調査、分析してきた。この研究は、ブルジェの小説が戦時下という特殊な社会的状況において、知識層だけではなく、一般層にどのように受容されたかを解明する手がかりとなるであろう。その成果は平成28年6月に開催される比較文学会第78回全国大会(於：東京大学)において発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計3件)

田中琢三「戦時下の日本におけるモーリス・バレスの受容について」、『お茶の水女子大学 人文科学研究』、第12巻、お茶の水女子大学、2016年3月、pp. 131-140。(査読有)

TANAKA Takuzo, « La réception de Paul Bourget et de la « littérature traditionaliste » française chez Simon Dazai », *Ochanomizu University Studies in Arts and Culture*, Ochanomizu University, n° 11, March 2015, pp. 43-52. (査読有)

TANAKA Takuzo, « L'influence de Paul Bourget sur Kiyoshi Hiraizumi : rencontre des deux traditionalismes japonais et français », *Ochanomizu University Studies*

*in Arts and Culture*, Ochanomizu University,  
n° 10, March 2014, pp. 15-25. (査読有)

〔学会発表〕(計1件)

田中琢三「戦前の日本におけるモーリス・パレスの受容について」、日本比較文学会第53回東京大会、東京工業大学大岡山キャンパス、2015年10月17日

〔その他〕

ホームページ等

「田中琢三のホームページ」

<http://tanakatakuzo.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 琢三 (TANAKA Takuzo)

お茶の水女子大学・基幹研究院・助教

研究者番号：50610945